幼児の教育　第100巻　第5号　平成13年5月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

創刊100周年

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

2001

5

第一巻第一号（明治34年創刊号）表紙

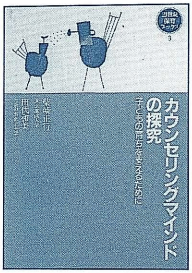
第100巻 第5号 日本幼稚園協会

21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

3月・3冊 同時刊行！

編集委員　森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（東京家政大学教授）
柏女霊峰（淑徳大学教授）



21世紀保育ブックス③

カウンセリングマインドの探究
子どもの育ちを支えるために

柴崎正行　東京家政大学　　**田代和美**　お茶の水女子大学

保育者が子どもと信頼関係を築いていくこと、子どものさまざまな表現から心の動きを理解していくこと、これらは、保育の営みの中で極めて大切なことです。近年、保育現場で重視されるようになったカウンセリングマインド。具体的にどのような考え方や、内容なのでしょうか。また、カウンセリングとの関係は？　カウンセリングマインドの具体像を探ります。

Ｂ６判　208頁　定価：本体1,200円＋税

21世紀保育ブックス④

子ども虐待の理解と対応
子どもを虐待から守るために

庄司順一　青山学院大学

子ども虐待が頻繁に取り沙汰される社会背景を受けて、子ども虐待への関心が高まっています。「保育所保育指針」にも「虐待などへの対応」が記載され、「児童虐待の防止等に関する法律」も施行されました。しかし、虐待が発生する家庭はさまざまな問題を抱えており、一個人、一機関では対応できません。多くの人が関心を高め、理解を深めて協力、連携をしていくことが、今、子どもを虐待から守るために求められているのではないでしょうか。

Ｂ６判　192頁　定価：本体1,200円＋税

21世紀保育ブックス⑤

知的好奇心を育てる保育
学びの三つのモード論

無藤　隆　お茶の水女子大学

子どもが学び、成長していくのは、まわりのものや人に出会い、関わるという営みを通してなされます。その関わりの中で、思考も感情も働き、子どもの人格全体が活動していきます。子どもの遊びの中に学びをとらえることにより、遊びや活動がいかに知的な発達へと広がるかが見えてきます。子どもの知的好奇心や探究心を育む、幼児期にふさわしい知的発達を促す保育のあり方について、学びの三つのモードという新しい視点から具体的に考えていきます。

Ｂ６判　192頁　定価：本体1,200円＋税

既刊　①　新しい教育要領・保育指針のすべて　　森上史朗
　　②　新時代の保育サービス　　柏女霊峰・山本真実

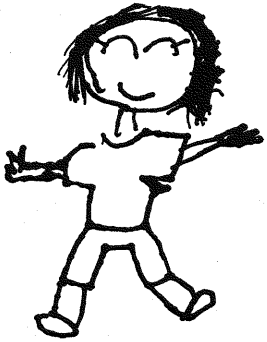
＜以下続刊＞

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第100巻　第5号



幼児の教育

目次

——第一〇〇巻　第五号——

「幼児の生命力を育てる保育」を……河邉　杲…（4）

『幼児の教育』と私　『幼児の教育』一〇〇巻に寄せて
—第五十六～六十四巻ごろの編集員の思い出—……木原　溥子…（8）

ちょっと　暖まる　はなし……鍋島　惠美…（13）

横浜の保育事情を探る
—少子化社会の中での子ども過密地域—……渡辺　英則…（20）

ある日……（30）

© 2001
日本幼稚園協会

私が幼児教育を志した頃(17)
—第二次世界大戦直後の普通のアメリカ人の精神風土— ……津守　真…（32）
いま、子どもたちは　手作り弁当について思うこと ……増田　康子…（42）
耳をすまして　目をこらして(13) ……宮里　暁美…（48）
幼稚園誕生の時代—関信三の葛藤—
(七)帰国して—幼稚園に出会うまで ……国吉　栄…（50）
比企の畑から　断念すること ……小宮山洋夫…（60）

表紙絵／片柳　淳子
扉題字／津守　真
扉カット／第二十三巻第一号表紙・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「浮かぶ」
編集委員／田代　和美・高橋　陽子・桝田　正子
編集部／仲　明子

「幼児の生命力を育てる保育」を

河邉　杲

〈新入園児の子どもたちが少しずつだけれど、自分の顔を見せてくれているように思う。気持ちがほぐれていると感じていることも素直に出せるのだなと子どものつぶやきから感じられる。保育室の前一面に咲き出したチューリップの花を見てある子が「わあ！」の歓声をあげると、まわりの子が集って来て「これが大きい！」「これがきれい」。また蕾を見つけると「これは悪魔にやられている。魔法がとけると元気になるぞ」と男の子。「ねえ先生、なんでこのチューリップはこんなに大きくて、これは小さいの？」私が……「わかった！　お父さんチューリップとお母さん

チューリップと赤ちゃんチューリップなんじゃない？」と言うと、まわりの子どもたちが反応して、妹や弟の名前が飛び交った。「これは私。これは妹」とすごく嬉しそう。

チューリップの花一輪でも昨日まで青味がかった蕾が多かったのが赤味を帯び、その姿を鮮やかに変えて来た様子を見逃さないだけでなく、それを自分の嬉しさに変えて受けとめているのかなとも思った。

午前中は小雨が降り雲もかかっていたが給食が終った頃、少しばかり日差しが届くと、チューリップが蕾を大きく広げ始めた。その様子も子どもたちは見逃さず、しっかり受け止めすごく不思議がっていた。「わあ！　大きくなった」と大へん興奮していた。「魔法がとけた！」というような意味の言葉を言っていた。表現こそ乏しく様々であるが、チューリップの花の様子を自分のことのように喜んでいる子どもたちといっしょに居て、なんだかとても、ほのぼのとしたものを感じた。〉

＊

これは四歳児クラス（三年保育の三歳児クラスからの進級児十五名と、新入園児十六名、計三十一名の編成）担任の松山和子先生の四月十五日の保育実践の記録の抜すいである。

こうした日々の子どもとの保育の現象を、殆んど毎日のように、実に誠実に書きとめられて来ていて貴重な保育資料でもあると思う。（近日この記録を整理し、まとめ刊行できるような企画がすすめられている。）

この記録からは様々なことを学ぶことができるが、ここではその一、二について気づいたことを述べたいと思う。

先ず最初に気づかされたことは、子どもたちの

生命力への信頼についてである。

入園当初に出会う様々な不安感や当惑のような事象を子どもたちはくぐり抜けねばならない。精神的緊張からの脱出であり、解放感、とか自由感の獲得とでも言えることである。

そうでないと自己実現の第一歩がふみ出せないことは周知のことであろう。

この子どもたちに最も必要な経験が計画され、用意もし、具体的な援助の手だてもいろいろと工夫されもして来ている。

待つ保育論まで論議されもして来ている。「遊ばせて置くだけでは幼児の主体的な活動を促すことにはならない」とも指導されるが現実なかなか思うように子どもが育とうとする姿をみせてくれないで混乱とまでは行かないまでも毎年、同じ課題を持ちつづけられているのではないだろうか。

人間についての根本の考察と言うより私たち自身の保育についての省察ができていないからではないかと思う。

私は幼児教育にかかわった五〇年程前から「自発」は自然発生的ととらえるべきだと考えて来た。「自発」の「自」は自分での「自」とも理解できるが、人間の本質から考えれば「おのずから」でなければならない。「好きな絵をかいてごらん」と言われて自由に描けるものでないことは表現について研究された方はすぐ理解されるが、「必ず動き出そうとする」という人間の営みの根本のところはなかなか理解しにくいように思われる。

言ってしまえば「そんなこと…」と思われていることが案外頭で理解されても動きになってこないことに気づくのが省察であろう。

子どもは生命力をもって生長しようとしている。保育の第一義はこれでなくてはならない。松

山先生の保育の姿勢にもこのことが確認できる。それは、そのまま子どもの姿に具現される。

次に子どもたちの姿を見ると、まわりの自然の小さな変化にもからだや心の全細胞を働かせて、これと向きあおうとしているのが見えてくる。感覚を総動員して、持っている知識を全部を投げ出し、これを自分のものとしてとらえようとしたり、その感動を表現したり想像した夢物語を創造したりして話すなどや自分のものとしたい欲求が課題の形となって、その解決のための情報を収集すべく、そこに居あわせた保育者に情報を求めたりしている。

生物学的に言えば最高感度のバイオセンサーの働きが起きていると言ってもよい。

またその発見したものを、まわりの仲間に伝達したくなって発信し、そこに極めて自然な交流が生じている。そしてその伝達し、交流し合う喜びがつみ重さねられて生命力の働きは増大していくことが如実に見られる。

しかし保育についての現象を詳述することは人間細胞の働きを解説する以上にむつかしい。

今、私は松山先生の四月十五日の保育実践の記録の一コマをとりあげて、保育の本質にふれようとしたが、いささかの落穂拾い的な役割しか果していないことを充分自覚しながら、意の通じ難い部分を汲みとっていただきたいと思う。

『幼児の教育』刊行事業百年を祝福し、新たなる発展と変革に大いに寄与して行って戴きたいと念じると共に、この偉業に出会えた幸福と光栄に感謝の意を表したいと思う。

（元洗足学園短期大学）

『幼児の教育』と私

『幼児の教育』一〇〇巻に寄せて

―第五十六～六十四巻ごろの編集員の思い出―

木原　溥子

一九五七年八月より私は、池戸允子さんの跡を継いで『幼児の教育』誌の編集実務をお手伝いすることになった。北村雅子さん、私の次に担当された井上直子さんと一緒に仕事をした時を含めて九年ほどになる。この頃の日本は幼児教育が普及し、幼稚園の数も増えて、その教育内容を充実されることが求められていた。それに応えるように社会の子どもに対する理解も進みつつあった。また、児童学――即ち、児童心理

学、小児保健、臨床心理、精神衛生、福祉など――の分野での進歩も著しく、人間に直接間接に関係するものは殆ど保育の世界とのつながりが認められた時代でもあった。

月一回の編集会議は附属幼稚園園長室で行い、及川ふみ先生（お茶の水女子大学を定年になられた後は坂元彦太郎先生に代わる）と津守真先生がおられ、編集実務係として私が列席していた。私は両先生の学識の広さには毎回、敬服させられていた。津守先生が「次号にはこういうものを」とてきぱきと提案されると、及川先生が賛同された。また及川先生も「〇〇先生にこういうことを書いてもらいましょう」と提案される――打てば響くような進行で次の編集内容がまことにスムーズに決定されたものである。坂元先生が附属幼稚園長として編集スタッフになられてからも同様であった。

『幼児の教育』の倉橋先生以来の編集方針に関しては、本誌一月号に津守先生が書いておられるが、一貫して保育の精神を伝えているという姿勢は、きびしく保たれてきた。

この仕事に自分もかかわっているという喜びは大きかったし、微力ながら責任も感じていた。原稿を頂戴するごとに新鮮な感動をもって読み、割付をしたものであった。

時々いただいた原稿の行数がオーバーしたり、枚数足らずだったりする。また図表や写真が入って予定頁数が変わってしまうこともしばしある。すると頁調整が必要になる。そんな時、原稿の追加はいつも津守先生に急拠お願いして助けていただいた。先生は内外について驚くほどたくさんの知識を持っておられるので、お願いする度に新しい資料を提供して下さるのであった。

また、このようなこともあった。その号の予定にはなかったのであるが、頁数の都合で急拠、坂元彦太郎先生の講演を記録整理したものを掲載することになった。『幼児の教育』誌のスタッフでもいらっしゃる先生は簡単に承諾して下さると思ったし、先生のお宅が私の住居に近かったこともあり、夕刻直接にその原稿を持ってうかがった。先生は「家まで押しかけてきたのだから緊急だね。緊急なのは引き受けないことにしている。それに、講演と書きことばとは違うから、書き直さなければならないから、お断りッ！」といたずらっぽくおっしゃった。横にいらした奥様が、「あら、そんなこと言わないでやっておあげなさいよ」とニコニコしながら言われた。すると先生は現金なことに「では、特別に急いで書いてあげましょう」とおっしゃった。

翌日に「出来ましたよ」と新しく書かれた原稿をお渡し下さった。おかげでその月号も支障なく発行が出来たのである。

その頃協力委員でおられた牛島義友先生に巻頭言をいただいた時のことである。あ

る日「〆切日が近い」と先生にお電話をしたところ、愛育研究所にお出かけになる日を示され、そこで原稿を頂戴することになった。約束の日にお訪ねすると、その場で先生が口述し、秘書の方が筆記なさった。私は先生のいつもと変らぬ骨の通ったお話に聴き入っていた。「はい、ここまでで何枚になっていますか」「九枚と十六行です」「では、も少しね」とおっしゃって、残り四行で本文の締めくくりをなさり、「お待ちどうさま」と原稿を下さった。すごい！　内容もすばらしかったが、単に慣れていらっしゃるだけでもなく、先生の能力の本質の一端を垣間見たような気がして、今もその日のことをまざまざと思い出すのである。

そのほか、当時保育の現場におられ、意欲的に次々と試みをしておられた先生方が、その実践状況を聞いてほしいと、津守研究室を訪問されることがあった。夕方遅く、勤め帰りに寄られるのである。そこで急拠、幾人かも加わって勉強会が開かれる。とても良い現場経験であったから、御持参のなぐり書きをいただいて整理し、原稿にさせていただいたこともある。皆、若い意気に燃えていた。今その方々は、保育者養成に精進しておられる。

津守先生の御指導のもとに共編した『幼児の教育　原理と研究』は、その頃『幼児の教育』誌に掲載された論説の中から抜粋して一書にしたものである。出版された時、及川先生は私の今の職場で幼児教育科長をしていらっしゃって、大変お喜びにな

り、その時のお顔は今も忘れられない。今は絶版になって久しいが、幼児教育の考え方や保育実践向上のための研究例などを納め、現在でも十分活用できる基本的な資料を含んでいる。これこそ一〇〇年を迎えた『幼児の教育』誌の変わらぬ姿を示したものと思っている。

例えば元保育学会会長・故山下俊郎先生の「現代の誤った知育偏重の準備教育を排し、生活指導に中核をおく」ことの正しさは、今も変わらないのである。

一〇〇巻の記念にあたり、かつて私がお手伝いした当時のことを思い出しながら筆をとらせていただいた。その頃の日本の保育界に多大な貢献をなさって故人となられた先生方や、今もご活躍の先生方との出会いを、なつかしく想起すると共に、感謝申し上げている次第である。

新しい世紀に向って『幼児の教育』誌の一層の発展を祈っている。

（洗足学園短期大学）

ちょっと　暖まる　はなし

鍋島　惠美

新しい出会いが始まる季節です。保育者であるわたしの生活もずいぶん年を重ねてきました。それでも春は、心ときめくときです。二年前に出会ったNちゃんという女の子の話をしたいと思います。この年は、五歳児と一年だけ生活をともにすることになりました。

鼻くそが見つからないの

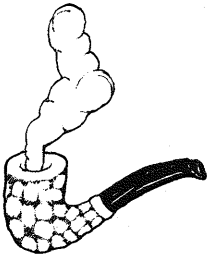
十月の誕生会に遊戯室に集まったときです。

「先生、Nちゃんな、鼻くそ落としてしもたの。探したけどみつからへんの。どうしょ？」と、尋ねられ「？？？」冗談と思うには、N子の表情が

あまりにも真剣だったので「そう。鼻くそは、大丈夫。落としておいてもいいよ。だってこんなに小さいでしょ」と、手で小ささを示して伝えると、「へへぇ。そうか。ごめんなさい」と、N子。実に妙な会話を交わしました。この頃、彼女は、家庭でも大人からすれば、滑稽とも思えることで「どうしよう？　ごめんなさい」という話しかけがあったようです。お母さんが、第三子を身ごもられて体調が優れず入院をされていた時期でもあり、お父さんも「母親のことも関係するんでしょうか」と、今のN子の様子を受け止めておられた。

みんなで攻めんかってええやんか！
もう　みんな　嫌い！

年が明けて二月。五、六人の生活グループごとに牛乳を飲んでいたときのことです。N子のグループは、誰が、牛乳を飲んだ後のテーブルの片づけをするのか、ジャンケンで決めることになったようでした。「もうみんな嫌い！」と、N子がワァーと泣き出しました。同じグループのY子が、「Nちゃんのこと信じてるえ」M子も「わたしも信じてるって。泣かんときって」と、子ども達の慰める声が聞こえてきます。しばらく様子を観ながら、わたしも「どうしたの」と、声をかけました。N子は、「みんなが、攻めはる。わたしは、後出ししようと思ってしたんと違うのに」と、泣きじゃくりながら話してくれました。どうも、最後のジャンケンの勝負が、H男とN子になって、結果的には、N子の後出しになってしまい、その場にいる仲間から、「Nちゃん、後出しずるいで」と、攻めら



れたようです。「そうやったんか。Nちゃんは、後出ししようとしたのと違うんだね」と、わたしが話すと、N子はうなずきます。ジャンケンの相手だったH男は、自分は攻めたわけでもなく、ことの成り行きに身の処しようがなく困り顔でいました。その場は、互いに納得して収まりましたが、何となくそのグループは、いい感じの空気が流れていませんでした。

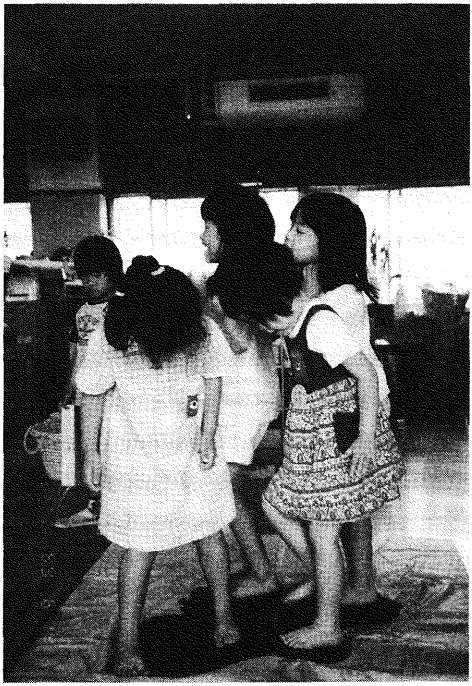
いいところ観たわ！　わたしも観た！

子ども達が牛乳を飲み終えて、みんなが集まるのを手遊びをしながら待っていました。N子は、泣きやんだものの悲しい気持ちは、まだ癒えないようで目に涙をいっぱいためながらグループのテーブルを片づけ始めました。その姿を見たH男が、さっと立ち上がってN子の後を追いテーブルを持つのに手を貸してやりました。N子のことを気にとめていたわたしの目に、二人の姿が入ってきました。「わたし、今とってもいいところ観たわ」と、クラスのみんなに思わず言葉をかけていました。すると、H子も「わたしも観た」と返してくれました。泣いて訴えたN子のことを気にかけていたのは、わたしだけでなく、H男もY子もいたのです。そのことがよけいにわたしの心を弾ませてくれました。そのうれしい思いをクラスのみんなに伝えました。すると、クラスの中にファーと暖かい空気が流れるようでした。みんなの顔がにこにこしていました。

帰る支度が整って、N子とわたしが二人になる時を得ました。N子が「今日は、悲しいことがいっぱいあった」と、言いました。朝の遊びのもめ事といい、帰りがけのこの事件といい本当に今日は、N子の泣き顔をよく目にした一日でした。

「そうやったね。でも、最後は、Hちゃんも手

伝ってくれたし、いつも仲良しのYちゃんやMちゃんも信じてるって言ってくれたし、うれしいこともあったね。悲しいこともあったけど、うれしいこともあったね」と、話すと、N子は、「うん」と、うなずきました。わたしが、「元気になるかな」と、尋ねると「うん」と、N子の返事。「じゃ、涙を拭いて帰ろう！」と、弾みをつけ伝えると、彼女もわたしの心がわかったとみえ、涙を拭いて元気な足取りでテラスを駆けていきました。この日のこのエピソードを迎えに来られた保護者の方に、子どもの思いやりとして伝えました。聞いておられた大人の表情が、ほっとゆるむのがわかりました。



◀〝気持ちいいなあ〟土粘土に触れて　心もからだも弾む

ひとりになりたいの　ほっといて！

修了式を間近に控えた三月の朝です。N子と仲良しのY子とM子。M子と仲良しのR子に、W子も加わって、ままごと遊びを始めていました。そ

こへ、後からN子が遊びに参加しました。「もういい！　ほっといて！　もういいって言ってるやろ」と、激怒したN子の声が響いてきました。何事がおこったのかと様子を観ていますと、今度は、そばにあった小型積み木を振り上げて「もういいって言うてるやろ！　Nちゃんは、ひとりになりたいの！」と、泣きわめきだしました。ものを振り上げ、こんなに感情が高ぶっているN子を見るのは、初めてです。どうしていいのかわからないでいる仲良しのY子の心が、わたしにはよくわかりました。これ以上この状況のままもよくないと思いわたしは、「Nちゃんは、ひとりになりたいのか。そうなのか。わかったよ。こっちへおいで」と、N子をその場から離して落ち着けてやりたいと思いました。

隣のクラスのストーブのあるところへ一緒に行きました。「ここだと暖かいし、ここでしばらくひとりになったらいいね。暖まったらいいよ」と、けんかのことは聞かずに、今の感情を納めるのにいい場所を提供しました。そこは、ちょうど保育室の片隅で、じゅうたんが敷かれ、おもちゃ棚でしきりのあるちょっとした空間でした。S男がひとり暖をとっていました。その横に、N子をかけさせてやりました。N子は、けんかの場所から離れることで、感情が落ち着いたようで、わたしの話しかけにうなずいて応えてくれました。

それから、わたしは、Y子達の所に戻り、「どうなったの？」と、さっきのいきさつを聞いてみました。M子が、「MとRちゃんとが一番上のお姉さんで」と、話し出すと、W子が、「Wが、お母さんでな、Yちゃんが、赤ちゃんでな、Nちゃんも一番上のお姉さんになりたいって言わはってん」と、次々に話してくれました。どうもなりたい役が重なったことからのけんかのようです。そ

のことで話し合いになった時に、後から参加したN子は、すでに仲間で話がまとまってしまっていることに憤慨したようです。そして、そのことがとても寂しかったようです。Y子達に「誰でもひとりになりたいことって、あるよね。Nちゃんもひとりになって暖まったら大丈夫にならはるやろ」と、わたしは話しました。彼女たちもそのことはわかってくれたようで、再び遊びだしました。

ただいま　さっきはごめんな

ずいぶん経ってから、N子がもとのところへ戻ってきました。どうするのかと思い離れてみていますと、「ただいま。さっきはごめんな」と、N子が謝りました。Y子達は、一瞬黙ったままでした。少しの間合いがあり、Y子が、「いいよ」と、返事をしたことから、N子が仲間入りして、再び自然に遊びが続きました。わたしは、感無量

▲「怖がらなくていいよ　お姉ちゃんだよ」　――三歳児と遊ぶなかで――

でした。子ども達がここまで心を素直に表現して受け入れあえるとは思いませんでした。この出来事を帰る前の集うひとときに、クラスのみんなに、当事者の顔を見ながら語りました。話が進むなかで、W子は、「それは、Wやな。けんかになったんやな」と、自分たちのことに思い返しながら話を聞いていました。わたしは、クラスで歌っていた『みんなともだち』（作詞・作曲　中川ひろたか）の歌を歌いたくなり、みんなと一緒に歌いました。そして、「あったかーい話でした」と、語り終えたとき、N子が、そばに来て、わたしの耳元に「先生、もっと暖かかったこというたげよか」と、話しかけてくれました。わたしが、うなずくと、「ストーブにいたときにな、I君がな、暖かいでって、モルモット抱かせてくれたの」と、N子が教えてくれました。「そう。それは暖かかったやろうな。よかったね」と、わたしが答えると、にこっと笑って自分のいたところに戻って行きました。偶然の出来事でしょう。その偶然の重なりがすごいことに思えました。ひとりでいたN子のからだが、ストーブで暖まり、肌にモルモットの暖かさが伝わり、そうしているうちに、心が和んできたのでしょう。保育者の言葉を越えるできごとでした。

こんなに心が素直に語り合える子どもと、そしてその周りにいる子ども達に出会えたことが幸せでした。Nちゃんが暖まると同時にわたしの心もあつくなりました。心凍るような出来事が、子どもを巻き込んで起こる時代に、こんなエピソードをわたしの周りにいる人と分かち合って暖まってきました。わたしは、今の時代だからこそ、あえて心を伝え分かり合っていきたいと思います。

（京都教育大学教育学部附属幼稚園）

横浜の保育事情を探る

―少子化社会の中での子ども過密地域―

渡辺　英則

横浜の保育事情は複雑です。全国的には少子化が社会問題となっている中で、横浜では子どもの数が急増し、保育所や幼稚園に入れないことが問題化しています。特に保育所の保留児数が日本一になったために、認可外保育施設にも市が助成をする横浜保育室制度ができ、そこに企業が参加しだしたり、幼稚園にも保育所的な役割が求められるなど、さまざまな動きが起こっています。

その一方で、昨今のマスコミで取り上げられたように、横浜の一部の地域では、子どもの数が急増したことで、幼稚園に入園するために、親が一週間以上ならばなければならないような事態も生み出しています。

また、行政の財政削減を受けて、公立幼稚園を廃止しようとする各地の動きは、元々公立幼稚園がない横浜への関心を高め、横浜が一つのモデルになっています。

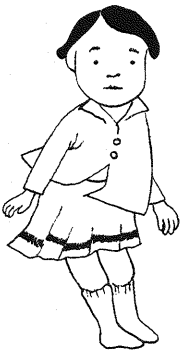
さらに、子どもの数に対して、保育所や幼稚園の数が少ない現象は、親にも大きな変化をもたらしています。幼稚園選びのミニコミ誌を作ったり、地域密着型のホームページなどで育児の情報が行き交います。行政中心の子育て支援ではなく、母親たちの力で新しい子育てネットワークを作り出しているのです。

子どもの数が減ってきたことに国をあげて取り組む中、子どもの数が多い横浜には、このようなさまざまな動きが起こりつつあります。その実情を概観してみたいと思います。

保育所の事情

先ほども触れましたが、横浜市は全国一、二を争う保留児の多い都市です。平成九年度の一九六二人を最高に、平成十二年度でも一五三五人の保留児を抱えています。そのため横浜市は平成九年から五年間で定員を六〇〇〇人増やし、二六四〇〇人にする緊急保育計画を立案しました。その内容は、平成十三年度までに、新設保育所二十一カ所（公立三カ所、民間十八カ所）を含み、認可定員の見直しや増改築で認可保育所の定員を三〇〇〇人増やし、さらに市が定める一定の基準を満たした認可外保育施設を横浜保育室として助成することで、三〇〇〇人の保留児を受け入れようとするものです。

また既存の保育所も大変です。保育所の認可定員の見直し増員を図るとともに、保育所の役割も多様化し



てきました。障害児の受け入れ、延長保育、園庭解放や育児相談などといった地域の子育て支援事業など、今まで保育所が担ってきた役割の他に、新たな役割も果たしていかなければならなくなったからです。

これら保育所の動きは、横浜に保育児が多いだけに、働きながら安心して子どもを預けたい母親の支援になっているのですが、その一方で緊急の対応であるだけに、保育所保育指針総則に書かれているような、乳幼児にとって最善の利益が考慮されているかというと、疑問に思えることも多く見受けられます。

このことは、平成十二年の二月に保育学会の横浜地区で行った保育士へのアンケート結果にもでています。今の保育の態勢について尋ねた質問では、

・いくら工夫しても人手が足りない。とにかく忙しい。

・細切れの保育になる。

・労働条件が悪化し、保育所に余裕がない。職員体制がよくない。パートが多い。

・看護婦なので保育の専門家ではないが、クラスに入って時にパートの人と二人で保育をしている。このような体制に疑問を感じる。

・設備が不十分。狭い部屋で人数が多すぎる。部屋があまりにも狭く、布団を少し重ねてひくこともある。

・予算が限られ十分な教材が用意できない。

などの意見が多く書かれていました。そのいくつかを紹介してみましょう。

「時代の流れでそういうことも言ってられないが、七～八年前まではゆったりとした保育を心がけ、人の出入りもあまりせず、担任と愛着をしっかり行うというような保育を行ってきたのに、今はパートさんも細切れで、時差勤には、その人の替わりに人が入ればいいという考え方だから。仕方ないけど、今まで大切にしてきた保育はどこへいったのか?と思う時が時々ある。」(公立保育所、経験六～十年の保育士)

「職員の研修や休暇があると、子ども達の保育が手薄になったり、合同保育になる。地域支援も職員を増やしたりすることなく、現状のままで行うことになっているので、結局入所児童に無理を強いていると思う。」（公立保育所、経験二～五年の保育士）

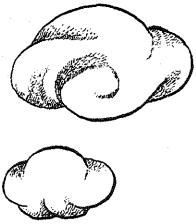
「今の保育制度は、親のニーズにものすごく応えたものだと思う。でも実際に保育されているのは子ども達で、子ども達の声や気持ちは全く無視されているように感じてしまうことがたくさんある。例えば延長保育に関して言えば、親の労働時間プラス通勤時間で十一時間、そしてそれ以上の延長を要求されているが、労働時間の短縮や、産・育休の充実、子育て後の仕事への復帰のしやすさの方は全くすすんでいかないのに、保育の延長は、どんどん進んでいく、というのは私は違うと思う。乳幼児の最善の利益？？？、どこが？？？と思ってしまいます。」（公立保育所、経験二～五年の保育士）

さらに最近の親に対しては、次のような意見が多くありました。

「必死で仕事をして、子どもと少しでも早く会いたいから急いで帰ってくる、という人が少なくなっている気がする。少しでも長く子どもを見てほしいという人が増えている。親の都合に子どもを合わせてしまっている人が多い。」

少子化社会といいながら、実際に横浜はどの保育所も定員に近いか定員を超えている保育所がほとんどです。このような状況の中で、少子化対策や子育て支援を保育所が率先して担おうとすれば、そのしわ寄せは当然保育士や子どもにきます。認可外保育施設である横浜保育室の実情は、まだ未調査なので詳しくわかりませんが、園庭のないビルの中で長時間過ごすような保育環境が、保育所保育指針でいう子どもの最善の利益を考慮しているとはいえません。保育所や横浜保育室の増設などで、保留児童の数は減らすことができる

かもしれませんが、その背後で行政の補助金を当てにして、大手の企業やこれまでまったく保育の経験のない人までもが、保育所や横浜保育室の経営に参入しようとしています。働く女性が安心して子どもを生み育てる社会は、このような経営を優先する保育施設が多くできることで実現していくとはとても思えないのですが……。



幼稚園の事情

保育所化が進む幼稚園

幼稚園の動きも複雑です。横浜は公立幼稚園がなく、三〇五園すべてが私立幼稚園です。私学が独自性を出して、各園がさまざまな特色を出すことは、ある面では望ましいのですが、そのことが幼稚園にとっても、親にとっても微妙な影響を及ぼしています。

私立幼稚園ですから、各園の保育が、幼稚園教育要領の改訂によってすぐに変わるということはほとんどなかったのですが、今回の教育要領改定では、預かり保育という、幼稚園の三種の神器（長時間保育、給食、通園バス）にかかわることが取り上げられたことで、多くの園で預かり保育が行なわれるようになりました。（平成十二年五月一日現在で、協会加盟園二七三園中一四七園、五四・六パーセントの園が実施しています。横浜市幼稚園協会資料より）

満三歳児入園については、まだ行っている園は少数ですが、園児数が減り、経営的に苦しくなければ、実施に踏み切る園は多いでしょう。（平成十二年五月一日現在で受け入れを予定している園は二五二園中七十四園です。同じく横浜市幼稚園協会資料より）

また教育要領の改定により、毎週土曜日が休みとなる園が増えた反面、いままでは水曜日を午前保育にして、研究・研修や保育の準備に当てていた園が、土曜日の全休をきっかけに週五日すべてを一日保育にする

園が増え、研究や研修会への出席率が減少する傾向もでてきています。

幼稚園の教員平均勤続年数が五～六年であることを考えると、保育者には親のニーズに合わせた多様なサービスを行うことが求められる一方で、研修や保育の質など、幼稚園がこれまで大事にしてきた子どもにかかわる本質的な部分は、なおざりにならざるを得ない状況が起こりつつあります。親の高学歴化や育児環境の悪化は、親の育児を支える家庭との連携や、多様な変容をみせる子どもの内面理解など、保育者により高度な専門性を求めています。その一方で、実際には保育そのものより、長時間の保育や送迎バスの乗務など、親へのサービスに追われる保育者の実像が見え隠れしています。教員の平均勤続年数や給与面から考えると、公立幼稚園より私立幼稚園の方が、経費削減という面では圧倒的に効率的ではあるのですが、それを一概に喜んではいられない事情はどれだけ考慮されているのでしょうか。

このことは、親が園に納める保育料や、市や県が幼稚園に支払う補助金にも関係してきます。公立幼稚園がない分、その経費削減分が保育料の軽減のための補助金に回されてもいいはずなのですが、現実には幼稚園教育関係への予算は増えず、また少子化で園児減少の不安から、幼稚園も、入園料、保育料をほとんど値上げできません。そのしわ寄せが若い保育者しか雇いきれない脆弱な幼稚園の経営体質や毎年多くの新人を抱えざるを得ない保育体制を生み出しているのです。

幼稚園の経営基盤が弱体化しているのに比べ、経営基盤が比較的しっかりしているのが保育所です。特に横浜は、保留児童解消のため、行政主導で幼稚園の保育所化も進めようとしているのですから、幼稚園が保育所志向を高めていくのは当然の流れともいえます。

このような流れを作ったきっかけが、平成九年の十月に「横浜方式」と呼ばれた預かり保育モデル幼稚園の事業です。この事業は、保留児童をかかえる横浜市が、地域における保育資源として幼稚園に着目し、〇

歳から就学前までの一貫した保育事業（午前七時三十分～午後八時三十分の十一時間保育）を幼稚園で実施し、保留児童の解消と保育ニーズへの対応を図るというものです。三園でスタートとしたこの事業は、現在五園に広がり、徐々に地域に定着しつつあります。また、平成十二年度からは、さらに私立幼稚園の預かり保育を拡充させるために、二十園（定員二〇〇人増）を目標に預かり保育の新規実施園を募集しています。

ただ幼稚園が保育所的な事業を行いだすことには、考慮すべきことも多くあります。働く親の支援を幼稚園がどこまですべきなのか、また幼稚園本来の役割である子どもを育てることを基本に、親も園という地域に巻き込んで子どもを育てる楽しさや、社会参加する生き甲斐などをもっと追求すべきではないのかなど、幼稚園や保育所の本質的な役割の見直しも含めて、しばらくは行政の動きも見据えながら各幼稚園での模索が続きそうです。

少子化のなかでの幼稚園不足

その一方で、横浜の一部の地域では、ニュータウン地域を中心に幼稚園不足が起こり、それが新聞やテレビ等のマスコミに取り上げられました。この騒動はたぶんにマスコミによってもたらされた感もあるのですが、助成制度がしっかりしていて開設に費用があまりかからない保育所に比べ、幼稚園の建設には膨大な費用がかかり、人口の増加に比較して幼稚園の数が少ないことに一因があります。何年後かに確実に起こる人口減、少子化を考えると、返済計画に大きな不安が残る私立幼稚園を安易につくることはできません。だからといって、公立小学校が行っているように、園庭にプレハブの園舎を建てて急場をしのぐような対応は、行政の壁が厚く実現できません。

このような事情はさておき、容易に幼稚園に入れないという地域事情は、幼稚園選びに対する母親の意識を高めることに確実に貢献しました。さまざまな保育を行う幼稚園に対し、どの園を選んだらいいかという

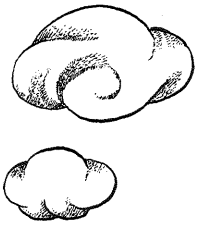
母親の悩みは、次第に大きくなり、幼稚園選びの情報誌を自主的に発行させたり、インターネットのホームページなどで情報交換を盛んにさせるなど、母親の活動を活発化させています。ホームページ上に一部の親の意見がでることで、幼稚園が偏った評価を受ける恐れもありますが、そのような意見を通じて、保育で大事にしていることが、親にはきちんと伝わっていない現実も見えてきました。育児に対して、また幼稚園教育に対して、親がどのように考えているのか、また園からは何をどのように伝えていくべきかなど、インターネットが普及してきたことで、新たな課題もみえてきたのです。

子育て支援の現状

女性の育児を通しての社会参加は、保育所や幼稚園選びにとどまるわけではありません。横浜には児童館や子育てひろばのような日常的に親子が集える公的な場がほとんど整備されていません。そのため、乳幼児期の子どもをもつ親にとっては必ずしも子育てがしやすい環境とは言えないのです。転勤族なども多く、公園デビューに苦しむ親子も少なくないようです。親子が孤立しがちな子育て環境の中にあって、保健所などが子育てサークルの育成に力を入れており、サークル活動は盛んだと言えるのですが、子どもの数はそれ以上に多いので限界もあります。

このような子育て事情を踏まえて、行政だけに頼るのではなく、母親が主体的に子育てネットワークを立ち上げるような動向もあります。例えば「びーのびーの」は専業主婦の母親たちが中心となって作った、幼い子どもをもつ親子がくつろぎ支えあう場です。武蔵野市立０１２３吉祥寺のような子育て広場の必要性を感じていた母親たちがＮＰＯ法人の認可を受けて生まれたものです。ボランティアスタッフにより運営されており、まさに地域住民による小さな子育て共同体だと言えるでしょう。

また、母親たちによって運営されているトランタン



ネットワーク新聞社は「支援されるお母さんからアクションするお母さんへ」というテーマをかかげ、家庭保育園をスタートさせました。家庭保育園は自分の子どもを育てながら地域の子どもの面倒を見るという互助的なファミリーサポートシステムです。母親自身の自立支援と子育てと地域を結ぶ架け橋として機能しています。（横浜市でも平成十二年度から、市民同士が子どもを預け預かりあう横浜子育てサポートシステムの整備を始めました。）

「びーのびーの」や「家庭保育園」などの特徴は行政主導の流れにあるのではなく、母親主体で運営されていることにあります。もちろん、行政によるサポートが必要な側面もあるのですが、単に支援される対象ではなく、支援する立場にもなるという互助的な子育てが生まれてきていることはとても大切なことだと思われるのです。

横浜にみえてくる子育ての未来

国をあげて少子化時代という社会の流れを受けて、さまざまな施策がとられている中で、乳幼児の数が増加しているという特殊事情をもつ横浜には、さまざまな育児の可能性と課題がみえてきます。制度的な対応で何とか今の状態を乗り切ろうとする行政の姿勢とともに、その流れにのった企業の横浜保育室への参加、多様な子育て支援事業を担う保育所と保育者の多忙さ、預かり保育など保育所化にすすむかそれとも親を巻込んで地域の子育て支援を担うかの選択を迫られる幼稚園、そして多様な形で社会に参加し子育てを支援しようとする母親たちの動きなど、子育ての未来を予見しうる現象が起こっています。

ただ、どのような現象が起こっているとしても、乳幼児期の子どもがどのような環境で育つのがふさわしいのかという議論をなくしては、社会や行政の都合ば

かりが優先され、子どもの生活が省みられない危険性があります。働く女性を支援する必要はありますが、その一方で、認可された保育所が不足しているからという理由で、預かることや経営を優先させた保育所で長時間生活する子どもが、本当にふさわしい環境を保証されているといえるかどうかは、常に検討されなければなりません。さらにいえば、乳児期などは、保育所などで長く預かることを中心に考えるのではなく、家庭保育園のような、もっと小さい単位での子育て制度の充実や、母親が育児休暇を積極的にとれる社会的な制度の普及も検討される必要があるでしょう。

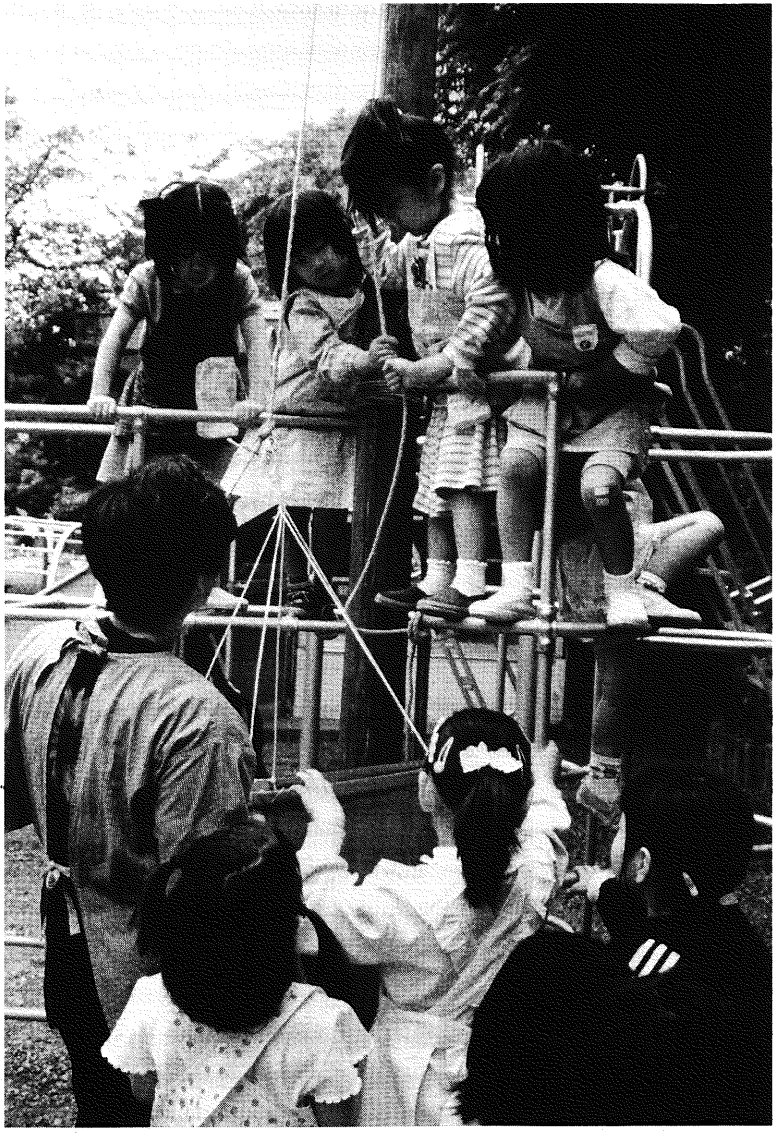
また、幼稚園などを通じて、専業主婦といわれる女性が、会社に縛られない団体やサークル活動などを通じて、ボランティアや地域活動を行うことで、多様な生き方ができるよう支える役割を果たすことも、子育て支援につながることです。その意味では、家庭保育園の充実には、幼稚園だからこそ人材が供給できるともいえます。

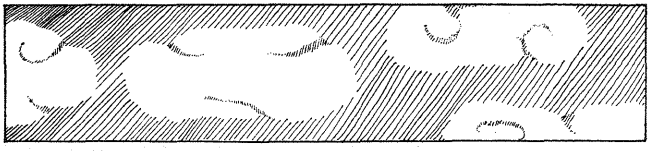
虐待や学級崩壊、不登校など、子どもからのメッセージは、いまの社会が子どもにとって生きにくいことを訴えています。家庭や地域の教育力を回復し、親が子育てに希望をもつ社会の実現には、改めて子どもの視点から、今の社会を問い直すことからはじめるしかないのではないでしょうか。

（横浜市・港北幼稚園）

ある日

撮影・平野　清





私が幼児教育を志した頃(17)

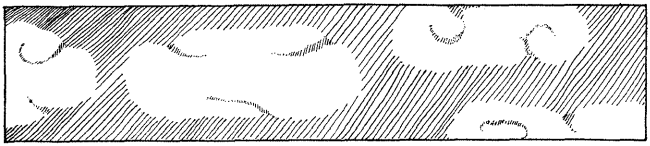
―第二次世界大戦直後の普通のアメリカ人の精神風土―

津守　真

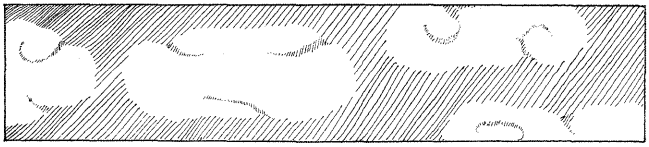
アルバータ・トンプソン夫人と北川大輔先生

一九五二年七月十二日に私はトンプソン家に引っ越した。

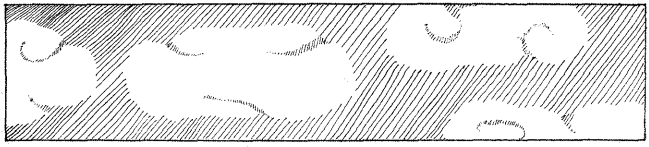
最初に述べたように、アルバータ・トンプソン夫人と北川大輔先生は、私の米国留学の契機となった方である。北川先生は戦争中日系人強制収容所のチャプレンをしておられたが、私の留学当時はミネアポリス市のヒューマンリレーション委員会のチェアマンをつとめておられた。トンプソン夫人も同じ委員会の委員だった。



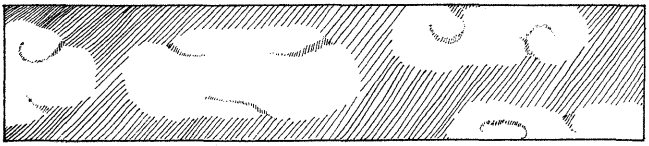
ここで北川先生について、一言述べておきたい。北川先生は一九四一年の日米開戦まではシアトルの近くの平和な村の教会で牧師をしておられた。真珠湾攻撃の翌朝、シアトルに住む日本人会の主だった人達が連邦警察により検挙された。それは日本とアメリカが戦争状態に入ったという以外に何の根拠もないことだった。日系人をそのままの場所に住まわせておくことは国家の安全を脅かすことになるという無責任な噂話や宣伝が世論となって、一九四二年五月に、強制立ち退き令により、日系人達は行く先も分からずに汽車で収容所に送られた。ナチのホロコーストとは事情が違うけれども、何十年も住んでいた家屋も家財道具も没収されて、どこに行くのかも分からずに汽車に乗せられて金網の中の強制収容所に送られた人々の集団心理には共通のものがあっただろう。その瞬間から「私（北川大輔）の人生は私自身のものであることを停止してしまった」と後に先生は書いておられる（注　北川大輔著『一世と二世―強制収容所の日々―』伊達安子訳、聖公会出版、一九八六）。先生と親しくおつきあいした私は、日頃のことからそれが良く分かった。本来学者肌の人が、日系人がアメリカの社会に受け入れられるための実務に専念する人となった。当時のアメリカでは、日本人は真珠湾攻撃のやり方が示すように卑劣で危険な存在であるという考え方が次々にとエスカレートして、日本人と親しくしてい



た白人も当局から疑われるほどになり、日本人は物心とも戦時アメリカの社会で苦境にあった。こういうアメリカ人の病的興奮状態のなかにあっても、「日本人との長い間の個人的交流があった人達は、日本人のため喜んで証人となり、労力を惜しまなかった。そのような友人達の心強い言葉や行為は、日増しに悪化して行く世論の一般状況に打ちひしがれそうになる日本人を守ってくれた。」「強制収容所の鉄条網に囲まれた長期にわたる生活の最中、――バスの中で読み始めたポール・ティリッヒの論文『嵐の時代』に私（北川大輔）は深い感動をおぼえた。それを読むことが神意のように思われ、文字通り行から行へと私は貪り読んだ。――ティリッヒの論文は、戦時中のアメリカ人のヒステリー状態によって、またそれに対処するアメリカ政府の集団馬鹿騒ぎによって、また高度に組織化された利益集団の故意の策謀によって引きおこされた災害の犠牲者の一人である私を、一つの世界大社会に向かって前進する現代史を担う一員に変えてしまった。」アメリカ社会には、ヒューマニズムに真っすぐに向き合って前進する善の面と、偏見にヒステリックに反応する悪の面と両方があることは、現代も昔も変わらない。私が知り合った頃の先生は、いつも日系人たちの果てしない書類を書きながら、訥々とだいじなことを話された。



一九五〇年のアメリカは現代とは違い、黒人や少数人種に対する差別が行われていた。ミネソタ州は歴史的に進歩的ヒューマニズムの伝統があり、南北戦争の時には南部から逃げてきた黒人をいち早く受け入れ、以来、多くの黒人がここに定住した。ヒューマンリレーション委員会は、第二次世界大戦直後、人種的偏見のために住宅や職業を得るのに困難していたマイノリティの人達の世話をするのを主目的とした市長の諮問委員会だった。北川先生はトンプソン夫人と労を共にし、互いに信頼し合っていることは、トンプソン家でコーヒーを飲みながら話す先生を見れば、すぐに分かった。黒人を「白人の重荷」と見ている白人は、まさにその事実によって、白人自身が「黒人の重荷」になっていることを二人とも知っていた。だれでも、直接に会い、話を聞き交わる機会をもつならば、偏見から解放され、互いに人間として理解し合えるようになるというのが二人の共通の信条だった。北川先生は、私が初めて汽車でミネアポリスの駅に着いたときから、私を米国の人々の間を連れ回って紹介してくださった。「アメリカ人は、人と人との信頼を大事にする。一度信頼を得れば生涯つづく。食事の時間に遅れるときにはかならず電話をするように」と最初に言われたことはいつも私の心に留まっていた。北川大輔はアメリカの友人の間ではファーザー・ダイと呼んで親しまれていた。ファーザー・ダイの紹

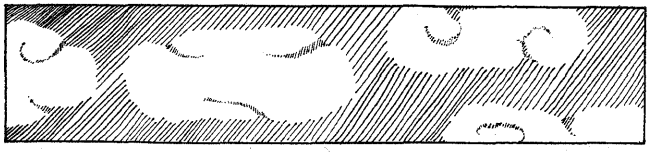


介ということで、私はどんなに得をしたか分からない。

トンプソン家

こういう進歩的な運動をしているからと言って、トンプソン夫人は特別な女史ではなく、ごく普通の家庭人であった。ご主人は鉄道会社に勤める会社員で、モンタナ、ダコタなどミッドウエストで働いてこられた。話し好きで、台所にはいつも薄いコーヒーが沸かしてあって、朝はおしゃべりから始まった。毎週月曜日は洗濯日で、私も下着を籠に入れておくと夕方には乾いていた。日本にはまだ洗濯機も電気冷蔵庫もなかった時代であった。ご主人のケンネスは、この美人で活動的な奥さんを尊敬しきっていた。外国人留学生達が来たときなど、夫人が座談の中心で、ご主人は相槌をうっていつも夫人の傍らに付き添っていた。

トンプソン家は、ミシシッピー川のほとりにあった。美しいミシシッピーの流れは、冬になると表面はすっかり雪に蔽われ、春になって氷が溶けると若葉が萌え、たちまち濃い緑の夏になる。秋には一斉に木々が紅葉して二週間ほどの間に冬が訪れて、一面に灰色の樹木になってしまう。私がトンプソン家に泊まっていたのは、七月から八月で、毎日夕食が終わると、私はミシシッピーのほとりに出て、美しい

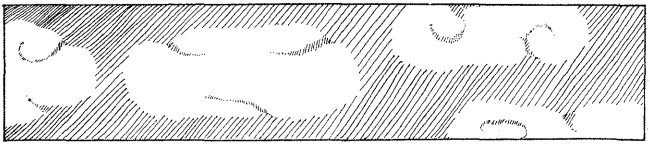


空と水を眺めた。夏の水辺は蚊が多い。おびただしく群がる蚊を追い払いながら歩くと私は日本の夏を思い出した。

ミセス・ロング

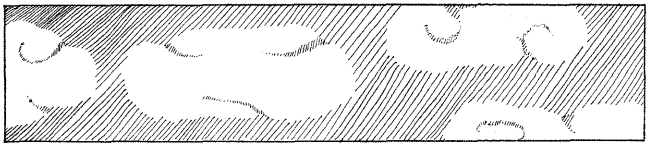
ミセス・ロングは、トンプソン夫人の母親で、八〇歳を超えていた。三〇年前にご主人を亡くし、長年モンタナに住んだ。ときどきミネアポリスに出て来て息子娘達の家に泊まった。歩くのが大儀だったが、まだまだ元気で、私がトンプソン家に滞在していたときにはここに一緒に住んでいた。モンタナ・ダコタと言うと、東部のアメリカ人にとっては遙か西部で、開拓移民が幌馬車に乗って行った大草原の真ん中である。ミセス・ロングは典型的なパイオニア気質の老婦人で、敬虔な宗教的感覚の持ち主だった。反面ユーモアに富み、私は大学から帰るといつも揺り椅子に腰掛けていたミセス・ロングと世間話をするのが楽しみだった。

トンプソン家に行って間もないころ、私は私の父の家がアメリカ軍に接収されていることを話したことがあった。そのときのミセス・ロングのきつい口調を忘れることはできない。「それはあなたのお父さんが建てた自分の家だろう。他人の家を取る権利が一体どこの国の誰にあるのだ。もしもそういうことが行われるならば、



それは正義に反する。何人であろうと、個人の財産に手を触れる権利はない。」自分たちの手で原野を切り開いて家を建て家庭と生活を作る。そうして自分たちの勤労と努力で築いたものは自分たちのものであることを確固たる調子で断言する自信と信念とをこの八〇歳の老婆はもっている。戦争に敗れた私共にとっては、占領軍が家を占領するのは当たり前のように思っていたが、こういう人達に支えられたアメリカの軍隊だから私の家が接収されても個人的には人間的なつきあいができたのだと思う。

ある日、こんなことがあった。トンプソン夫妻とミセス・ロングは知人を訪ねて外出し、私は試験の前日で一人家にいた。本を読んでいたら突然どこかでがさごそ音がした。アメリカの家には、当時の日本の家のようにネズミはいないし、リスが戸口でいたずらしているのかと思っていた。トンプソン夫人は毎朝台所のドアをあけてリスに餌をやっていた。はじめは気にしなかったが、留守中に泥棒が入ったかと心配になり、家中の電灯をつけて調べたがその気配はない。気のせいかと居間の椅子に戻って本を読み始めたらとたんに私の目の上を鳥のようなものが羽音をたてて飛んだのである。見ると黒いものがすーと部屋の中を飛んだ。戸を開けて街灯をつけて二十分くらい見ていたが、何も外に出て来なかった。皆が帰って来てその話

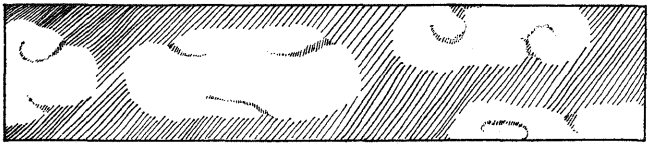


をしたが、私がホームシックで夢でも見ていたのだろうということになって、皆で大笑いして、それぞれ自分の寝室に戻った。それからしばらくして、ミセス・ロングがガウンのまま部屋から出て来て、自分のベッドルームに誘い、にやにやして良いものをみせてあげようと言って、壁の隅を指さした。何とそれは「こうもり」だった。それから大騒ぎしてケンネスと私とで箒でこうもりをドアの外に追い出した。以来、ミセス・ロングは、人を見る度に、この家では寝る前に壁をひとわたり見回してから寝ないと、こうもりに顔をなめられるぞと言ってからかった。このこうもりはどうも煙突から暖炉に降りて来て家に入り込んだらしい。

トンプソン夫人のおしゃべり

トンプソン夫人はよくしゃべる。

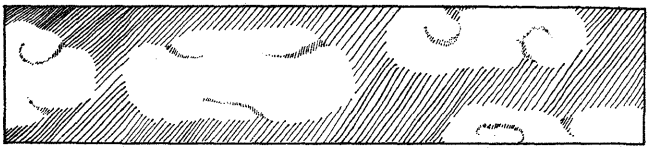
昨日は教会の帰りに、夫人の友達のラシーヌさんの家に寄った。ケンネスと私も車からおりることになった。一、二分で帰ると言っていたのに、その一、二分の長いこと。ケンネスが時計を見て、もう四時だ、四時半だというのに知らん顔で話が続く、結局そこの家を出たのが六時半だった。よく飛び入りの客があるが、一、二分と言いながら二、三時間もいることが珍しくない。トンプソン家に泊まっている



とそういうおしゃべりにもつきあわなくてはならなくて、私は閉口したが、その中にも大事な話があった。一昨日は、ラバンコラジというユーゴスラヴィアの人が来ていて、一九四〇年にヨーロッパでローマカトリックとギリシャカトリックとが互いに虐殺しあった話を聞いた。どちらもキリスト教徒である。こういう話を聞くと日本人が異教徒であることを有り難く思った。異教徒でありつづけながら聖書を読むことの重要さを説いた内村鑑三は日本の風土の生んだ基督教徒であることを思った。

ダンの入営

トンプソン家の一人息子ダンのところに八月五日に徴兵令状が来た。八月十八日の入隊だった。ダンはミネソタ大学二年生に在学中で音楽を専攻し、ダンの部屋からはパーカッションとシンバルの音がいつも響いていた。軍楽隊に入りたくて海軍を志願したのだが、入隊直前のダンはいらいらしていた。八月十日はダンの誕生日で、今度徴兵される友達が二人と親戚が夕食に来た。これから四年間軍隊で過ごさねばならないことを考えて、だれもが沈んでいた。私は自分が軍隊に入隊したときの体験を話し、皆が特別に熱心に耳を傾けた。



ダンの入隊の当日、トンプソン夫妻と私はミネアポリスの汽車の駅まで送って行った。勿論、出征兵士を送る駅頭風景などない。皆勝手にシカゴまで行く。他にはだれもそれらしい姿は見えなかった。トンプソン夫妻は普通の旅行者がするように、ダンと抱き合って涙を流した。ダンが入隊してしばらく、ミセス・ロングは、毎日「可哀想なダン、あんなに軍隊を嫌がっていたのに」と言っていた。

私の父は、ダンの入隊を聞いて、息子を軍隊に送る親の気持ちを伝えて、トンプソン夫人に長い手紙を書いた。そのことは久しい間、皆の話題になっていた。

いま、子どもたちは

手作り弁当について思うこと

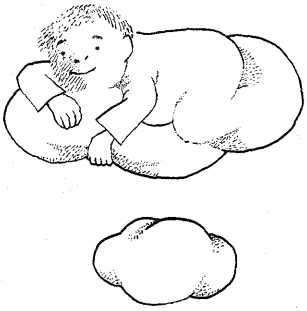
増田　康子

「おべんとおべんと　うれしいな……」

これは幼稚園に入って最初に教わる「おべんとうのうた」。

でも、私は、入園当初、その「おべんとう」の時間が嫌で嫌でたまらなかったのです。

皆でそろって、決まった時間に、それほどおなかもすいていないのに、食事をしなければいけない。というのが嫌だったのかもしれない。と、今になって思うのですが、お昼が近づいてくると元気がなくなってきて、「おべんとおべんと……」の歌の時は、机に突っ伏してメソメソしていた私でした。



といっても、最後までずっとそうしているわけではなく、そのうち先生にほめられてやっとお弁当の包みを開けて、周りが食べ終わる頃になって食べ始め、結局きれいにたいらげる。ということを繰り返していたように思います。

机に突っ伏して泣きながらも先生が気付いて肩に手を置いてくれるのを密かに待っていたような気もします。ただ先生の気を引きたかっただけかもしれません。

初めて、皆と一緒にお弁当を食べ始めることができた日、先生が、「お母さんに見せてね」と、一通の手紙を持たせてくれました。

母は、その手紙を読んでくれました。

「今日、初めて自分でお弁当を出して、泣かずにお友達と一緒に食べることができました。ほめてあげてください」。

母に頭をなでてほめてもらいながら、先生の温かさも感じていました。あの手紙がなかったら、次の日も机に突っ伏して泣いていたに違いありません。

幼稚園時のお弁当の思い出が詰まった、ブー・フー・ウーのアルミのお弁当箱は、母が捨てずにとっておいてくれたので、今では私の「お宝」になっています。

大学を卒業してから、私は練馬の学童クラブの指導員になりました。

放課後から五時（現在は六時）までの間、留守家庭の児童と過ごす仕事なので給食のない土曜日や学校休業日は、子どもたちと一緒にお弁当を食べることになります。

「お弁当はできるだけ手作りにしてください。」と、保護者の方にお願いしているので指導員だけ「ホカ弁」を買ってきて食べるわけにはいきません。それでも時間がなかったり、奥さんが作って

くれないという男性の指導員は、空のお弁当箱とコンビニで買ってきたおにぎりを持ってきて、別になっている手巻き用の「海苔」のフィルムを剥がして巻いて自分でにぎりなおし、お弁当箱に詰め込み、手作り弁当のように仕上げて子どもたちと一緒に食べたりと、陰でけっこう苦労していることもあるのです。そこまでやるなら初めから自分でおにぎりくらい作ったほうが早いような気がしますが……。

子どもたちが机を囲んでお弁当を見せっこすることを、お母さん方は予想しているのかそのお弁当といったらコンテストにでも出品しようかというような気合いの入れようです。

花模様ののり巻きや顔が描かれた御飯、デザートのりんごは兎さん。そんなお弁当を見ると、どうしても指導員も、「〇〇ちゃんのお弁当きれい！」とか「△□君のお弁当おいしそう！」などと言ってしまいます。

でも、ふと、横を見ると一目で昨晩の残り物だとわかるような、かたくなったスパゲティを詰め込んでお弁当を黙々と食べている子がいたら……。やはり、きれいなお弁当をほめるのもほどほどにするべきかな。と思うのです。それと同時に、夏休みのように毎日のことだったら、そんなにお弁当に気合いを入れる必要はないとも思います。

どうも、お母さんたちの中には、「お弁当作りが楽しい」と思っている方はあまりいないようですし……。

というのは、夏休み、週に一日の割で「みんなでお昼ごはんを作る日」という取組みをやった事があるのですが、その日になると急に出席が増えるのです。二百円か三百円の実費を貰うのですが、お母さん方は「安い！」と喜んで五回分も

いっぺんに出してくださったりします。そして連絡帳を見ると「お弁当作りから解放されて助かります」なんて書いてあるわけです。

保護者会のときに、

「感謝してもらっているのにこんなこと言ってすみませんが、お母さんに楽をしてもらうためにお昼作りをしているわけじゃないんですョ。みんなで食べたいものを考えて、役割を決めて、買い物に行ったり材料を洗ったり切ったり。そして楽しく会食して片付けまでがんばる。クラブとしては、そんな大きな意味のある取組みなんです」

と話したことがあるのですが、

「うん、それはわかる。でも助かるというのがホンネ」

とお母さん方は苦笑しながら、うなずいていました。でも、お昼作りを主役の子どもたちが喜んでいたことは確かでした。

保護者会で言い忘れた事を「クラブだより」に書きました。

「お母さんが作ったお弁当を喜んで食べてくれる人（子）がいるってとても幸せな事だと思うのですが……。」

お弁当作りなんて大嫌い！　というお母さんには、せめて子どもの前では楽しそうに作ってほしいと思います。

もうひとつ提案したいこと、三度の食事の中でお昼をもっと大切に考えてもよいのではないかということです。

日本人は、夕食を一番重くとる習慣になっているようですが、これは健康面からはあまり良いことではなく、昼食を

充実させるべき、ということはよく言われています。前の日の残り物をお弁当にするだけではなく、お弁当を考えながら買い物をして残り物を夕食に回すという発想があっても良いのではないかと思います。

練馬区主催のお祭のひとつに「練馬こどもまつり」というのがあります。私も区の職員として毎年関わっています。

その祭の従事者には、職員にもボランティアにも、区からお弁当が支給されるのですが、子どもの実行委員にも支給しても良いかどうかで、スッタモンダしたことがありました。子どもにも支給するべきだと主張する方の意見は、

「子どもだって大人と同じように仕事をしているのだから差別するのは良くない」というものでした。「子どもの働きも大人と同じように認めてほしい」というものだったと思います。

それはそれでわかるのですが、そこでちょっとひっかかったことは、「子どもがお弁当屋さんの作った大人と同じお弁当なんて喜ぶのだろうか」ということでした。子どもが、おそろいのお弁当とお母さんの手作り弁当のどちらを喜ぶか、そんなことははっきりしすぎています。

子どもにとってお弁当は、働きへの報酬ではなくてもっと単純に、「楽しみ」です。友達とおかずのとりかえっこをしてみたり、お弁当を作ってくれた人を思い出してその日の朝の家の様子をおしゃべりしたり。

作る人は確かに大変かも知れないけれど、楽しいお祭のためのお弁当なら、楽しんで作ってほしいものです。

こどもまつりのお弁当については、大人にも支給の必要はないと、私は思っています。

たかが「お弁当」の話ですが、お弁当を作る人と食べる人の間に通っているものを考えると、侮れないようです。

食べ物にまつわる思い出は、何時までも残るもので私の幼稚園の思い出にしても、お弁当から始まっているわけです。それを皮切りに運動会、遠足……と次々と思い出が開けてきます。

大人になったときに幼児期の良い思い出をたくさん持つための一つの要素として「手作り弁当」は、決して大袈裟ではないと思います。

（練馬区立土支田児童館）

目をこらして（13）

遊戯室で積み木の片付けをしていた時のこと。

「がもんくんはいつも片付けしないんだから……」という非難の声があがった。「そうだそうだ」と同調する子と、「がもんくんだってやろうとしているのよ」とかばう子の両方が出てきた。

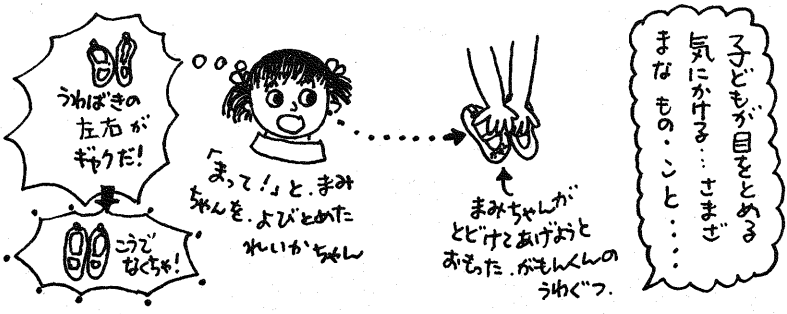
当事者ではない気楽さからか、子どもたちは当人そっちのけで、「この前だって……」「でもね……」と口々に話し出した。がもんくんはちょっと困った顔で積み木の間のスペースに入り込んでみんなの様子を見ていた。

七、八名が熱心に言い合いをしていた。その中の一人のまみちゃんが、がもんくんの上靴が遊戯室の真ん中に置いたままになっているのに気付いた。

まみちゃんは、がもんくん擁護派だったので、これはかわいそう！　と思ったのか、上靴を取りに行き彼の所へ届けようとした。その時だ。

みんなの言い合いには加わらず、一人せっせと積み木を片付けていたれいかちゃんが「待って！」と叫んだのだ。

まみちゃんは、「え？」という顔で立ち止まった。



耳をすまして

何？　れいかちゃんが上履きを届けたいっていうの？と思っているような少し困った顔のまみちゃんだった。

するとまたれいかちゃんが言った。

「ちがうの。靴の向きがちがうの！」

彼女は、まみちゃんが持っている上履きが左右逆になっていることを注意したのだった。

まみちゃんは、「ああ」という顔で左右を直し、改めて「がもんくん上履きあったよ！」と言って走り出した。

れいかちゃんはそれを見届け、安心したように片付けの続きを始めた。

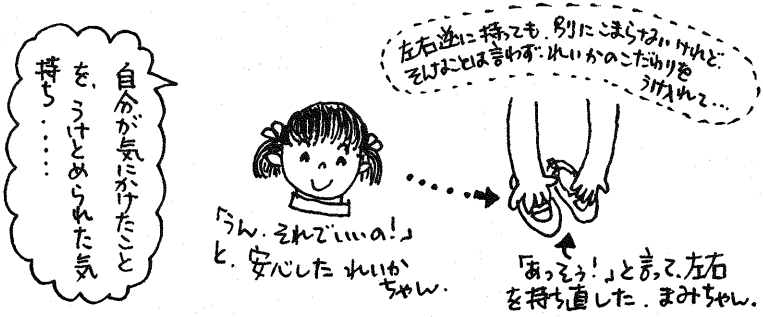
＊

これは一瞬の出来事。上履きの左右が逆になっていることにこだわる子がいる。そのこだわりを「ああ」と当たり前に受け止める子がいる。子どもはこうして生きている。

それぞれに違う何かにこだわっている。

それぞれのこだわりを知りたいと、今日も私は耳をすます。目をこらす。

絵と文　宮里暁美（目黒区立ふどう幼稚園）



幼稚園誕生の時代

――関信三の葛藤――

国吉　栄

(七)帰国して――幼稚園に出会うまで

帰国して

資金が許すぎりぎりまで英国に滞在した関信三は、明治六年十一月、ロンドンをあとにし、翌七年一月四日、帰国した。それから東京女子師範学校附属幼稚園の園長として歴史の表舞台に登場するまでの間、彼がどのような生活をしていたかについては、よくわかっていない。

ただ確かに言えることは、帰国した時点で彼はまだ太政官諜者の身分にあった、ということである。関信三は、資金上では東本願寺の留学生であったものの、最後の諜者報告書に関信三と署名していることが示し

ているように、出国時に太政官諜者としての任を解かれていたわけではない。しかも、明治六年二月にすでにキリスト教禁止の高札が降ろされていたにもかかわらず、キリスト教諜者はいまだ廃止されていなかった。キリスト教解禁への政策変更が主体的なものではなく、強いられたものであったことに加え、キリスト教対策とは別に、外国人の内輪の動きを知るアンテナとして諜者が有用であったためであろう。キリスト教諜者の廃止は、明治七年六月、関信三の帰国から半年あまりのちのことであった。

「異宗諜者廃止ニ付処分ノ義願」と題する一通の興味深い文書が残されている（塩入隆「諜者報告書」／日本プロテスタント史研究会『日本プロテスタント史の諸問題』所収　雄山閣　昭和58）。諜者の廃止からおよそ三か月後に小栗憲一によって書かれた手紙で、あて名は太政大臣三条実美。小栗は大谷派出身のかつての破邪僧で、東西両派のキリスト教諜者を束ねていた人物である。文書によれば、元諜者たちは何の手当てもないまま解雇され、困惑、困窮しきっていた。彼らをこのままに捨ておいていいのか、と小栗は言う。「其実効顕著セサル所ハ廟議ノ変化ニアリ、諜者ノ罪ニ非ス」。このまま捨ておけば彼らは朝旨をうらむようになろう。ぜひとも有能なものには職を、他のものには故郷へ帰る路銀を与えてほしい、と小栗は三条に迫った。諜者たちは、キリスト教解禁後一年あまりもずるずると働かされたあげく、ある日突然、一片の顧慮もなく放り出されたのである。これが、「伝言機械」として働いてきた彼らの受けたむくいであった。

一方、洋行中、現如の怒りをかった松本白華も、同じような苦境におかれていた。彼はパリで随行者としての任を解かれたのち、個人的に借金をして現如に同行して帰国した。そして帰国後は、長いあいだその借金返済の督促に苦しめられた。なんとか費用を弁じてもらえないかと、一度ならず本山に願い出たが叶わな

かった。

ともに闘った同志たちの無残な姿。彼らは一様に捨てられた存在であった。関信三は、権力のもつ恣意性を見極め、また自らがその一部であると信じて疑うこともなかった組織を相対化する一方で、その意図のままに手足となって動き、また動かされてきた己自身を直視せざるを得なかった。関信三は英国滞在中にすでにキリスト教解禁を知っていた。しかし、本当にすべてが無に帰したことを身に染みて感じたのは、帰国後のことであったろうと思う。

けれども、小栗憲一が三条実美への手紙のなかで職を与えよと名を挙げたものの中に、関信三、あるいは安藤劉太郎の名前はない。このことから、関信三自身は、帰国後、あるいは諜者の廃止後、すぐに新しい道を得たと推測することができる。開国日本にとって、海外の知識を取り入れることは最大の急務であった。外国で学んだ者は引く手あまたであり、かつ、彼のように当時の政権に協力的であった者が、帰国後そのままにしておかれるはずはなかった。諜者の廃止によって任務を解かれた関信三の前途は、他の諜者たちとは対照的に、急激に開かれていったのである。

ただ、関信三が、いつ、どんな部署に配属されたのかについては、はっきり特定することはできない。関信三の任官についてふれたものはいくつかあるが、ほとんどは、東京女子師範学校の英語教師となり、ついで附属幼稚園監事となったことを記すにとどまっている。例外的に、東京女子師範学校に奉職する以前の経

歴にふれているものがふたつある。ひとつは海後宗臣『明治文化全集、第10巻、教育編』（昭和4）「解題」で、もうひとつは、『一色町誌』の杉浦氏の記述である。両者の言うところは完全には一致していないが、重なっているところからすると、関信三は東京女子師範学校に奉職する前に、何らかの形で官立の東京語学校に所属していたと考えられる。ついで東京女子師範学校に移り、まずは英語教師として奉職した。こうしてみると、関信三の身は三条実美から文部省に預けられたと考えてよいと思われる。そして明らかに語学を生かす方向で就職を斡旋されている。時あたかも、文部省は、女子師範学校、ついで附属幼稚園の創設準備にとりかかっていた。ここにおいていよいよ関信三と幼稚園とが結びついてくるのである。

保育史にとっては、関信三がいつ幼稚園の理論と実際に出会ったのか、ということは大変興味ある問題である。従来は、彼が在英中に幼稚園に接し、幼稚園に関する知見を得たと考えられてきた。しかし、前回明らかにした「留学」の事情からみて、彼が英国滞在中に幼稚園を見知ったり、学んだりした可能性はきわめて低いと思われる。次回から扱う関信三の著作の中にも、彼が幼稚園創設以前に幼稚園についての知識を持っていた可能性を見出すことはできない。私は、関信三は東京女子師範学校に奉職したのちにはじめて幼稚園というものを知った、と考えたい。

幼稚園における関信三の業績と幼稚園に出会ってからの彼の人生については、彼の著作を検討する試みの中で明らかにするつもりである。ただ、何としても驚かされるのは、幼稚園に出会ってからの彼の目覚ましいばかりの働きぶりである。幼稚園創設の業に組み込まれた関信三は、その仕事を、決して受け身ではなく、消極的でなく、また否定的でなく、むしろそれとは反対に能動的、積極的かつ肯定的に自ら引き受けていた。残りの全生涯をかけた、と言ってもよい仕事ぶ

りであった。関信三は、なぜそのように幼稚園の仕事に熱中したのだろう。幼稚園の何が、それほどまでに彼をとらえたのだろうか。

『古今萬国英婦列伝』の翻訳

下って明治十年十月、すでに園長となっていた関信三は、幼稚園とは直接関係のない一冊の書物を出版した。『古今萬国英婦列伝』上下巻（青山堂）である。その「小引並凡例」、すなわち前書きによれば、同書は出版こそ十年になっているが、実際には、八年七月までには訳了し、関係者の閲覧を済ませていたものであったという。女子師範学校の開設にあたって、先進海外の優れた婦人を紹介する啓蒙的な書を編むように勧められて編訳されたものと思われる。編訳作業が八年七月以前に完了されていたとすると、同書は関信三が幼稚園の仕事に入る直前の仕事であったことになる。とすれば、同書から、やがて彼が幼稚園に心血を注ぐようになっていく背景を探ることができるのではないかと期待される。

「小引並凡例」の冒頭には、次のように記されている。

「近世西洋各国に於いて文人学士の間に男女同権の説盛んに起これり。（略）萬国古今の史書を閲するに既に婦女にして能く国を富し兵を強うし民風を化し土功を興す等の雄功壮事豈男子に譲らんや。（略）今試しに両性を折半し一千七百五十萬人を婦女とし各婦をして（略）苟も其天賦固有の良材を養成せは獨り国家の美観のみに非す其公益たる豈大ならすや」

一行目にある「男女同権」という語は、当時日本では耳新しい言葉だったが、一部ではそれを語ることが一種の流行のような観もあった。明治六年に結成され、実質的には七年から活動が世に問われた明六社でも、森有礼の「妻妾論」をきっかけとして、いわばひとつのテーマとして論じられていた。『明六雑誌』に

おいて、森有礼や福沢諭吉は、「男女同権」を一夫一婦制の問題として論じ、中村正直は、子を産み育てることによって間接的に国家に貢献するものとして、女子教育の必要を論じていた。しかし関信三の説は、それらと比べると際立って個性的であった。彼は、女性を、直接「国を富し兵を強うし民風を化し土功を興す等の雄功」の可能性を持つものととらえた。そしてそこから、男女の区別無く「其天賦固有の良材を養成せは獨り国家の美観のみに非す其公益たる豈大ならすや」という、彼の教育論が生まれている。この彼の考えは当時として極論に近いものだったのではないか。

ただし、彼が「国を富し兵を強うし」と言っている「富国強兵」のための教育は、一般的な意味での「富国強兵」ではない。「富国強兵」には「個」の思想はないが、彼には人間を「個」として見る姿勢がある。彼にとって、強くしなければならないのは、没個性の集団としての兵ではなく、国を構成する個々人でなければならなかった。

「小引並凡例」によれば、原稿が完成したところ、ある人が、関信三が同書に取りあげた人選に異議を唱えたという。関が取りあげた「セラミス（アッシリア女王）、クリヲパーラ（イッチンプト女王）、カセリン（ロシア女帝）」の行為は「驕奢、淫逸、殺逆」で、「其品行師法とするに足らさるのみならず却て痛責すへきものに似たり」というのである。啓蒙書、あるいはテキストとして不都合だというのであろう。

以下、それに対する関信三の反論である。

「予曰く子の言は誠に然り、然れとも時常に金（ゴールデン）世（エージ）に非す、人皆な神（ジバイン）種（レイス）の如くならんや。此代を以て彼時を較評し一失を見て全功を蔑棄するは公論に非す」

はたして彼のこの言葉をどのように理解すべきであろうか。おそらく相手は、平静穏やかな関の口から発された言葉の、思いがけぬ鋭さにひるんだのではない

か。この時、関信三にクレオパトラらを敢然と擁護させたものは、彼女たちをひとりの人間として見ることなく、ただ「驕奢、淫逸、殺逆」として断罪し、その存在を葬り去ろうとする、集団の論理に対する憤りではなかったろうか。

彼自身、正義のためと信じていたとはいえ、彼の「彼時」を、やはり悔いていたであろう。悔いていたからこそ、彼は今、新しい時代にあって、建国のために働こうとしていた。「此代を以て彼時を較評し一失を見て全功を蔑棄するは公論に非す」。彼はこの言葉をもって、世に挑んでいるように思える。彼は、欠けのある存在としての人間を認め、なお個としてその尊厳を認めることを求めた。人間を集団として見るのではなく、ひとりの人間として見ることを、強く求めたのである。彼自身が挫折から立ち上がって、ひとりの独立した人間として生きることを宣言した言葉ととることもできよう。

「予か此三女を書中に編伍する所以は、婦人にして雄才大畧萬古に卓越するものあるを表出し、男子にして婦人を蔑視するの癖を去らしめ、婦人をして亦た自棄する弊を脱せしめ、其気風を伸し、其意思を壮にし、其度量を弘め、其才智を拡充せしめんことを希望するなり」。実にすがすがしい論調である。彼が暮らした英国は、まさに「雄才大畧萬古に卓越する」女性、すなわちヴィクトリア女王の治政下であった。この女性を戴いて繁栄を謳歌する英国で、彼は深く自分と自国の、過去と現在と未来について思い巡らしてきたのである。

彼にとって、国力をつけ民風を養うためには、国民の半数を占める婦人の教育が必要であった。これは、森有礼とも福沢諭吉とも中村正直とも異なる視点であった。彼は女性を夫や子どもという概念と対で考えるのではなく、直接国家とかかわるそれ自体独立した存在と考えていた。言い換えれば、女性をそれだけで

教育するに足る存在として認識していたということである。

おそらく「此三女」をめぐることが、同書が当時出版されなかった理由であろう。彼は、問題ありとされた三人の伝記を削除して出版するのを潔しとしなかった。幼稚園に関する著作も出し、自らの立場も確とした十年末になって、自らの力で、八年七月付けの「小引並凡例」もそのままに、当初の構想通りのものを出版したのである。後世「穏やかな人」として語られる関信三の、内に秘めた強さが感じられよう。

関信三は、それまで彼を支えてきた秩序の崩壊と目的の喪失という徹底的な挫折を抱えながら、ひとりひっそりと、しかし、自ら選びとって、英国で時を過ごした。経済的な余裕はなく、後ろ盾もなく、しかし、束縛するものも、失うものもない英国での暮らしの中から、人間を、男女の別、身分、因習にとらわれずに一個の人間として見る、思い切って革新的な人間観が生まれたといえよう。関信三は、必ずしも教育者となる訓練を受けていたわけではない。しかし、英国における経験が、彼の新たな出発を準備したと言えるであろう。

なお蛇足ながら、「小引並凡例」において、母性としての女、育てるものとしての女について全く言及されていないことに注目しておきたい。もし彼がこの時すでに幼稚園についての知識や関心を持っていたとすれば、幼稚園開設の構想が出されていた同書執筆当時、多少なりともそれが反映されるのが自然ではないだろうか。フレーベルの幼稚園は、本来、母の教育と

結びついて構想されたものだからである。このことからも、関信三が洋行中に幼稚園を見知っていた可能性はほとんどないと言えるであろう。

関信三にとっての幼稚園

明治十年末、自他ともに認める幼稚園の指導者となっていた彼は、かつて出版寸前で頓挫した『古今萬国英婦列伝』を刊行するにあたって、二年前に書いた「小引並凡例」をそのまま用いた。それは、そこに書かれていること、すなわち、一人ひとりの人間が持つ「気風」「意思」「度量」「才知」を認め、それらを伸ばし強めることが、女子であれ、幼児であれ、彼にとっての教育の目的だったからであろうと思う。つまり、国力をつけ民風を養うために、国民の半数を占める婦人の教育が必要であったのと同様の意味で、彼は幼児の教育の重要性を認識していたのではないだろうか。

幼稚園に出会った関信三がそこに自らを賭けるに至った背景には、彼の生涯、特に彼とキリスト教との関係を見逃すことができない。関信三は諜者時代に中村正直を知り、はじめて女子教育というものをかいま見た。彼にとって中村正直は、天皇に受洗を勧め、静岡県下にキリスト教を蔓延させ、宣教師たちを援助する、警戒すべき日本人の筆頭ともいうべき存在であった。帰国してみれば、中村の名声は以前にまして高くなっていた。彼が設立した同人社では宣教師による日曜講話がなされ、アメリカン・ミッションホームのピアソンもそこで教鞭をとっていた。その中村正直を校長に戴く学校に設立されようとしている幼稚園である。彼は日本国が始めようとしている幼稚園の根底にキリスト教があることを、直感的に知っていた。本来であれば、彼にとって幼稚園の仕事は、能動的に取り組むどころか、忌避したいと考えるはずのものであった。

しかし、洋行は彼に新たな展望を与えていた。『古今萬国英婦列伝』のヴィクトリア女王の章に、次のような印象的な文章がある。

「唯国家人民ノ富強幸福ハ教法ヲ尊信シ人民ノ自由ヲ保存スルニ在ルコトヲ信」ず。関信三はこの文章に圏点を施して、特に強調している。これが、かつてキリスト教諜者であった関信三が、英国において体得した確信だったのである。もちろんそれは、彼自身が「教法」、すなわちキリスト教信仰を受け入れたことを意味するものではない。ただ彼は、英国という国家の理想を、キリスト教信仰と人民の自由の保証にあるととらえたのである。幼稚園というものを知った時、彼は誤またず、その根底にキリスト教の存在を認めた。そのことゆえに、関信三はかえって他の誰よりも強く、幼稚園の中に「国家人民ノ富強幸福」の基礎を造る可能性を信じたのではないだろうか。

明治九年、関信三は幼稚園に関する彼の最初の翻訳書『幼稚園記』を出版する。彼はその最初の頁に、「人類ノ幸福ト自治トハフレベル氏法制ノ基礎タリ」、と書いた。原典の序文の翻訳であるが、彼ほど深くこの文章を味わった者はいないのではないかと私は思う。彼は「人類ノ幸福ト自治」という個所に、原文にはない強調点を付している。これは、個としての人間の尊厳を基本とする『古今萬国英婦列伝』に表わされた彼にとっての教育の目的と相通ずる認識であろう。フレーベルの幼稚園の本旨を「人類の幸福と自治」と受け止めることによって、彼はがっぷりと幼稚園と取り組むことになったのである。

次回は、彼の最初の幼稚園書である『幼稚園記』について書いてみたい。

比企の畑から

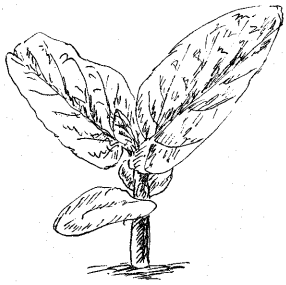
断念すること

小宮山　洋夫

梅が実をつけ、サクラが散り、気温も上がるツツジの開花を迎えると、畑の人影が、一段と濃密になる。

トウモロコシ、オクラ、カボチャ、キュウリ、夏ダイコン、サヤインゲン、エダマメなどの種まき、サトイモ、ショウガの植えつけがはじまる。

ヒマラヤ山麓が故郷のキュウリは、涼しい気候を好むが、夏の高温にも強い。春、ツツジの花の咲くころ種をまくと、初夏から夏、晩春にまくと夏から秋、夏にまくと、秋、収穫できる。なるべく早く収穫したいと、この辺りでは、春、種をまく。



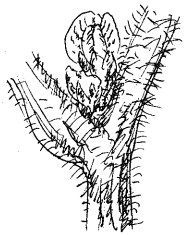
ダイズ（エダマメ）の芽生え

種をまくと、その周りに竹の支柱を四本立て、ビニールを張る。ウリハムシの食害を防ぐためである。この手当てを省くと、葉は食べられてボロボロになってしまう。

自前の穫りたてのエダマメは、本当においしい。比企の畑を借りた、はじめての春、エダマメの種を、二週間ほどずらし、二回に分けてまいた。

どちらも順調に育っているように見えた。はじめにまいたエダマメは、やがて、花を咲かせ、莢をつけ、その中に豆を太らせた。「よく、できましたね」

地主のF氏から声をかけられた。やや怪訝そうな表情が気になる。



ダイズ(エダマメ)の花

収穫したエダマメは、好評のうち食べ尽くした。ところが、後まきしたものは、莢の中の豆は茶変、萎縮していて、まったく食用にならなかった。開花期に発生した虫の食害を受けてしまったのだった。

この体験から昨春、さらに、三〜四回に分けて、種をまいた。普通、エダマメのダイズは、初夏から夏にかけて実を太らせ、収穫する。驚いたことに、早めにまいたものも、おそくまいたものも、ことごとく虫にやられ、食べ物にならなかった。

たまたま、園芸店で求めた種の他に、畑仲間のH氏からいただいたクロマメの種もまいていた。このクロマメは夏の盛りの中でも、花を咲かせない。

「エダマメは、まだ、とれないの?」

「夏が終わってしまうじゃない」

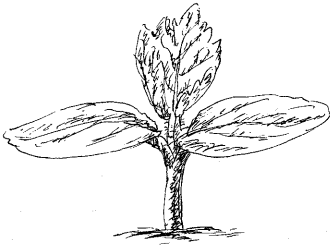
家族は、栽培者の非力を責める。クロマメは、最後の頼みの綱だ。

秋めいたころ、ようやく花をつけた。そして、ゆっくり実を太らせていく。収穫は、秋たけなわ、十月に入ってから。虫害を全く受けない見事に太ったマメが穫れた。マメの皮はやや黒みを帯びている。とてもうまい。深みがある。ゆっくり生育する晩生のために、開花期が、虫の発生する時期と重ならなかったのだ。氏の訝しげな表情も、これで氷解した。

ここの自然は、晩生のエダマメ向きなのである。それは、早生・中性のエダマメの栽培を止め、夏のエダマメを断念することを迫ってくる。

虫害を防ぐ第一の方法は、虫とたたかうことである。作物に薬を振りかける、あるいは、防虫ネット（寒冷紗など）で覆ってしまう。

「われわれは自然の作物の美しさと豊さの上に、あまたに多くの作為を加えすぎて、これをすっかり窒息させてしまったのだ。けれども自然はその純粋さの輝くいたるところで、われわれのはかなくつまらない試みに赤恥をかかせている……」（『エセー』第一巻　第三十一章　モンテーニュ　原二郎訳　岩波書店）


キュウリの芽生え

モンテーニュの語るように、第一の方法は、自然に対して、恥ずかしい。

同じ土地の畑で、栽培を続けていると、さまざまな虫の発生するそれぞれの時期がつかめてく

る。虫害を防ぐ第二の方法は、虫たちが自然を謳歌する時期をやり過ごすことである。それは、風土の特性を受入れ、その他の時期での栽培を、断念することだ。これは、案外むつかしい。

人には、何かにせき立てられる感覚が絶えず付きまとっている。それが、すこしでも「早くつくりたい」「早く食べたい」とする焦りとなってあらわれる。「エダマメは、夏の食べ物」という思い込みもある。動物は、自然に反することは、はじめから断念している。それに対し人は目的を設定すると、異常な情熱を傾ける。人は、自然を克服しようとする。

キュウリの雌花

昨年、キュウリの種を、晩春、フジの花の盛りにもまいてみた。その際、ビニールの囲いを施さなかった。それでも、ウリハムシの被害が見られなかった。すでに、虫は姿を消していたのだった。畑の景観を損ねず、手間も省け、しかもスピーディーに育ち、実をたくさんつけた。

ところで秋のクロマメのエダマメがおいしいのは、それが、クロマメの旬だからである。

（家庭菜園研究家）

カット　筆者

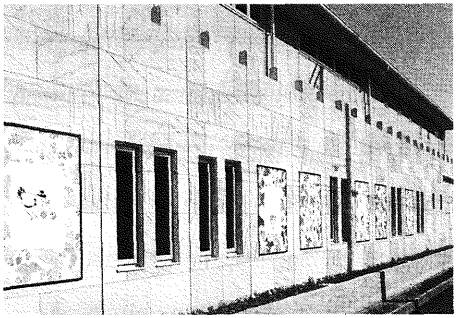
編集後記

右の写真の中央に描かれている絵は、昨年の五月号に掲載された彌永たたえ先生のカットです。それが壁画（下の写真、岐阜聖徳学園大学附属幼稚園）になりました。

一年ほど前に、彌永先生から、園舎の外壁を飾る壁画の依頼を受けているお話を伺いました。そこに本誌のカットが使われるということで、楽しみにしておりましたところ、できあがった園舎と外壁の八枚の壁画の写真をいただきました。

遊んでいる子のそばに本誌のカットがある、毎日それを見ている子がいる、その思いがけない出会いをうれしく思いました。

（A）



幼児の教育

第一〇〇巻　第五号
（二〇〇一年五月号）

定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十三年五月一日

編集兼発行人　田代和美

発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620 東京都港区三田五―一二―一

発売所　株式会社　フレーベル館
〒113―8611 東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

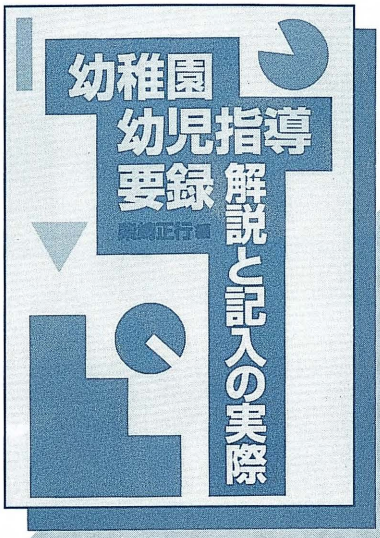
☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

お待たせしました!!
文部省の指導要録作成協力者会議のメンバーによる解説書の決定版です！

幼稚園幼児指導要録・解説と記入の実際

好評発売中



平成12年3月に改訂された「幼稚園幼児指導要録」の解説と具体的な記入の仕方を１冊の本にまとめました。ていねいで分かりやすい解説、今回から導入された満３歳入園の子どもから５歳児までの豊富な記入例を掲載しました。「要録」記入でお悩みの方に最適の本です。

〈内容構成〉

第１章　指導要録の意義
第２章　指導要録の解説と記入の実際
第３章　指導要録の取扱い
第４章　指導に関する記録の記入例

A5判・248頁

定価：本体1,500円＋税

柴崎正行（東京家政大学教授）編

執筆　安部真知子
（香川県高松市立檀紙幼稚園長）

岡上直子
（東京都教育庁指導部主任指導主事）

片岡真弓
（東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園教諭）

柴崎正行

田中雅道
（京都市・光明幼稚園長）

松村和子
（東京都・鶯谷さくら幼稚園副園長）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇〇巻　第五号　平成十三年五月一日（毎月一回一日発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

21世紀、止めどなく広がる保育機能の多様化の時代に贈る。

親による子ども虐待の横行する時代に
親が子育ての責任を果たすためには、保育者はどんなサポートができるか、共に考え提案しています。

少子化がますます進む時代に
子どもと接する経験が不十分なまま、保育の仕事に就こうとする保育者が多い今、子どもに何をみて、どうかかわればよいかを、分かりやすく説いています。

子どもを取り巻く環境の変化が著しい時代に
幼稚園、保育園のいずれも、今までとは異なる保育の課題が求められています。21世紀の保育の在り方と課題について、具体的に提案しています。

最新の資料と研究成果に基づいて
子どもの幸せを願い、子どもと共に歩む大人すべてに、保育の喜びと生きがいを感じられる保育の原理を示しています。

遊びに興ずる子どもたち（ききょう保育園）　本書より

現代保育学入門

子どもの発達と保育の原理を理解するために

最新刊

諏訪きぬ編・著
A5判・288頁
定価：本体2,000円＋税

●諏訪きぬ　プロフィール
名古屋大学大学院教育学研究科修士課程修了。同大学教育学部助手、鳥取大学教授などを経て、現在明星大学教授。
著書「保育が変わるとき」（編著・ひとなる書房）
「かかわりのなかで育ちあう」（編著・フレーベル館）
「子どもを活かす園内研修」（共編著・フレーベル館）他
保育理論・児童文化論を講議するかたわら、保育者研修、地域での子育てサポートに関わるなど、幅広く活躍中。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの フレーベル館